竪穴住居の地域性が表れる背景

――弥生時代中期後葉における伊勢湾沿岸地域を中心にして――

蔭山誠一

はじめに

竪穴住居は地面を掘りくぼめ、掘り込んだ底を床面とした住居で、原始古代における主要な住居形態であった。竪穴住居はその形態から、土器・石器・鉄器などの遺物と同様に当時の人々の生活を直接考えることのできる資料である。これまでその形態について様々な時代、地域について検討がなされてきた。特に本稿で扱う弥生時代の竪穴住居跡（以後竪穴住居）については全国的な視野において和島誠一・田中義昭(1)、石野博信(2)、橋本正(3)、宮本長二朗(4)、都出比呂志(5)によって検討がされており、北陸地域(6)や長野県(7)、関東地域(8)、東海地域(9)、九州地域(10)など地域を限定した住居形態の変遷を詳しく追求した研究もなされており、地域ごとの変遷が明らかにされてきている。

また弥生時代前半に西日本において発見されている「松菊里型住居」(11)、弥生時代中期以降に西日本に広がる住居内に高床部をもつ住居や「花弁型住居」のような特徴的な住居形態の広がり(12)や東日本における竪穴住居の平面形態・炉（形態・数・位置）の変化の多さに着目して、文化の伝播や人の移動・交流について(13)分析したものもある。

その中で都出が住居内の屋根を支えたと思われる主柱穴配置と炉の形態・位置についての相互関係を求め、西日本の「同心円構造」と東日本の「対称軸構造」という２つの地域性を明らかにしたのは卓見であった。

しかし、これらの研究では住居の平面形態のみ、炉の形態のみといった住居のそれぞれの要素のみ抽出した分析であるために、表れた地域性の持つ意味やそれぞれの要素の変化について十分に検討されずに終わっているものも多い。

また都出の指摘した竪穴住居の主柱穴配置と炉の形態・位置の相互関係の地域性とは別に、東日本においてはより小さい地域的な特徴をもつ竪穴住居の存在することも指摘されている。本論では東日本における多様な住居形態の地域的な違いに着目して、近年資料的に充実してきた弥生時代中期後葉の東日本における住居形態の地域性を明らかにし、その中で筆者のフィールドである伊勢湾沿岸地域に表れた２つの住居型についてその特徴を述べ、住居形態の変化する背景を考えてみたい。

弥生時代中期後葉における竪穴住居の地域性

竪穴住居の地域性は土器などと同様にその形態の差異によってのみ見いだされるものである。そこで弥生時代中期後葉の竪穴住居において普遍的に見いだされる竪穴掘り方平面、主柱穴配置、炉の形態と位置の４つの要素について分類し、近畿地方から関東地方西部における竪穴住居の地域型を明らかにする。

①竪穴掘り方平面の分類

以下の５形式に分類する。

円（楕円）形型…竪穴掘り方平面に直線の部分がないもの。

隅丸方形型…四角形平面で全ての辺に直線部分があるもの。

隅丸長方形型…四角形平面の長軸の長さが短軸の長さの1.2倍以上のもので、全ての辺に直線部分のあるもの。

胴張方形型…四角形平面の２辺が竪穴外側に弧状になるもの。

胴張長方形型…四角形平面の長軸の長さが短軸の長さの1.2倍以上のもので、2辺が竪穴外側に弧状になるもの。

②主柱穴配置の分類

以下の6つの配置と無主柱のものに分かれる。

2本配置…屋根の棟を支えたと思われる柱穴2個のみあるもの。

方形配置…4本の屋根を支えたと思われる柱穴が方形に配置されるもの。屋根の棟を支えたと思われる柱穴をさらにもつものもある。

長方形配置…4本あるいは6本の柱穴が長方形に配置されるもので、長方形の長辺の長さが短辺の長さの1.2倍以上になるもの。屋根の棟を支えたと思われる柱穴をさらにもつものもある。

多角形配置…5本以上の屋根を支えたと思われる柱穴が円周状に配置されるもの。

無主柱…屋根を支えたと思われる柱穴が不明瞭なもの、明確な柱配置が認められないもの。

③炉の形態の分類

以下の6形式に分かれる。

灰穴炉…都出比呂志が「灰穴炉」と呼ぶもので、直径1m前後、深さ50cm前後で床面に掘り込まれているピットで、ピット内において炭と灰の堆積があったり、ピットの周縁部に加熱赤変した痕跡が認められるものがある。ただしピットの底まで焼けていない。

地床炉＋灰穴炉（中央ピット）…前述の灰穴炉と地床炉が隣接して設けられるもの、切り合いをもって設けられているもの。

地床炉…床面を数cm～20cmまで掘り込み、そのくぼめた底、あるいは床面をそのまま火床として使うもの。

石置炉…地床炉の焼土面の住居内側縁に長さ30cm前後の細長偏平な石や径10cm程の河原石を3～4個据えたもので、炉縁石（据えられた石材）が鍵状やコ字状に置かれているものもある。

埋甕炉…床面を深さ15cm～20cmに掘り、甕・壺・鉢・高杯を径20cm前後の筒状に据えたもので、土器に囲まれた内部に焼土、炭粒の見つかる場合が多い。

土器置炉…石置炉の石が土器片に換わったもので、石置炉の炉縁石と同様、炉の住居内側に据えられている。

④炉の位置の分類

以下の3類に分類できる。

中央型…炉が住居の中央に位置するもの、対角にある主柱穴、竪穴掘り方平面の隅を結んだ交点にあるもの。

偏在型…炉は住居の中央よりややずれるが、主柱穴を結ぶ梁や桁の下に炉の一部がかからないもの。無主柱の住居では、竪穴周壁より中央に近く位置するもの。

主柱穴間型…炉が主柱穴を結ぶ梁や桁の下に炉の一部がかかるもの、それより竪穴周壁寄りに位置するもの。無主柱の住居では、中央より竪穴周壁に近く位置するもの。

⑤弥生時代中期後葉における竪穴住居の地域型

①～④で分類した基準をもとに、近畿地方から関東地方西部における弥生時代中期後葉の竪穴住居をみたものが第1表である(14)。この表にみられるように、各地域でいくつかの要素ごとに形式の偏る傾向がみられる。そこで地域ごとに竪穴住居の要素の特徴を集めて竪穴住居の地域型（住居型）を設定しよう。

遺跡番号	遺跡名	円(楕円)形型	胴張方形型	隅丸方形型	隅丸長方形型	胴張長方形型	2本配置	多角形配置	方形配置	長方形配置	無主柱	灰穴炉	地床炉+灰穴炉	地床炉	石置炉	埋甕炉	土器置炉	中央型	偏在型	主柱穴間型	住居数(棟)
①	三田市奈カリ与	◎		○	△		○	◎	○	△		○	○	△				◎	△		28
②	海南市亀川	◎					△	◎				◎						◎	○		4
③	五條市原	○						○				○						○			1
④	名張市辻垣内	○							○				○					○			1
⑤	名張市下川原	○	○	○		○			◎				◎					◎			4
⑥	守山市服部	○	△	△	△	△		○	△	△	◎	○		○				○	○		84
⑦	守山市二ノ畦	○		○	○		△	△			◎	○		◎				◎	△		10
⑧	津市長			◎	○				○	◎				◎	△			△	◎		13
⑨	津市山籠			○	◎					◎				◎	△			○	○		9
⑩	津市納所			○	○	○			○	○		△	○	○					◎		10
⑪	四日市市上野			○	◎				◎	○				◎				△	○	○	25
⑫	稲沢市一色青海			○	○	△			△	△	◎			◎				△	◎	○	56
⑬	甚目寺町大渕		△	○	◎	△			○	○	◎										52
⑭	甚目寺町阿弥陀寺				◎						○										5
⑮	清洲町朝日			○	◎	○			△	○	◎										87
⑯	名古屋市高蔵			○					○					◎					○	○	4
⑰	知立市天神				◎	○			△	◎				◎					○	◎	10
⑱	知立市荒新切			○	○					◎				◎						◎	3
⑲	豊橋市橋良			○	◎	○			○	◎				◎	○				◎	○	21
⑳	浜松市中平					◎				◎				◎					◎		3
㉑	袋井市鶴松	△			△	◎			○	◎				◎				◎	○		19
㉒	多治見市根本				○	○				◎				◎					◎		2
㉓	飯田市恒川			○	○	△			△	◎	○			○	○	◎			◎	△	35
㉔	松本市県町	△		○	△	◎			○	○	△			◎	○			◎	○		37
㉕	松本市宮淵本村	△	△	△	○	◎		△	○	○	◎			○	△	◎		◎	○	○	38
㉖	長野市松原	○	○	○	○	○		△	○	◎	△		△	◎		△	△	◎	○	△	76
㉗	長野市中俣	◎		△				○	○	△	△	△		◎				○	○	△	19
㉘	佐久市北西の久保	△	△	◎	○	△			○	◎				◎	○	△	△	◎	○	△	90
㉙	高崎市新保			△	◎					◎	△			◎				◎		○	8
㉚	前橋市清里・庚申塚			△	◎	△			○	◎	△			◎	○			◎	○		21
㉛	東松山市代正寺	○	△			◎			○	◎	△			◎	△			△	△	◎	13
㉜	坂戸市附鳥				△	○			○	○				○				○			7
㉝	今市市上山		○							○				○				○			1
㉞	秦野市砂田台	○	◎	○		○			◎	○	△			◎	○			△	◎	○	59
㉟	横浜市折本西原	◎	○	△	△	◎			◎	○				◎	○		○	△	◎	○	67
㊱	横浜市大塚	◎	○	△	△	◎			◎	○				◎	○		○	△	◎	△	123

第Ⅰ表　弥生時代中期後葉における竪穴住居の地域性

50%以上あるもの…◎　過半数はないが一定量（20～30%）あるもの…○　少数存在するもの…△

近畿西部型…円形型、多角形配置・方形配置、灰穴炉、中央型

近畿東部型…円形型、多角形配置・方形配置、
（伊賀型）　地床炉＋灰穴炉、中央型

尾張型…隅丸方形型・隅丸長方形型、無主柱・長方形配置、地床炉、偏在型

伊勢三河型…隅丸長方形型・胴張長方形型、長方形配置、地床炉・石置炉、偏在型・主柱穴間型

南信型…隅丸長方形型、長方形配置、埋甕炉・石置炉、偏在型

中信型…隅丸長方形型・胴張長方形型、長方形配置、地床炉・埋甕炉、中央型

北信型…円形型、多角形配置・方形配置、地床炉、中央型・偏在型

東信型…隅丸方形型、長方形配置、地床炉・石置炉、中央型

北西関東型…隅丸長方形型、長方形配置、地床炉、中央型

南関東型…円形型・胴張長方形型、方形配置、地床炉・石置炉・土器置炉、偏在型・主柱穴間型

以上の10住居型に分類した。これらの住居型の地域的広がりと各住居型の典型例を示したのが第１図である。

竪穴住居地域型のあり方

竪穴住居の地域性もその形態の違いによって認識できるとすれば前節で示した住居型の地理的な分布範囲の特徴を明らかにすることにより、各住居型の成り立つ背景がある程度わかるものと思われる。次に住居型の分布境界の表れ方と特徴をあげ、筆者のフィールドである伊勢湾沿岸地域に表れた尾張型と伊勢三河型の２つの住居型について検討し、住居型の成り立つ背景を考えたい。

①２つの住居型境界

さて前節までに示した竪穴住居の住居型の分布境界には、以下の２タイプがある。

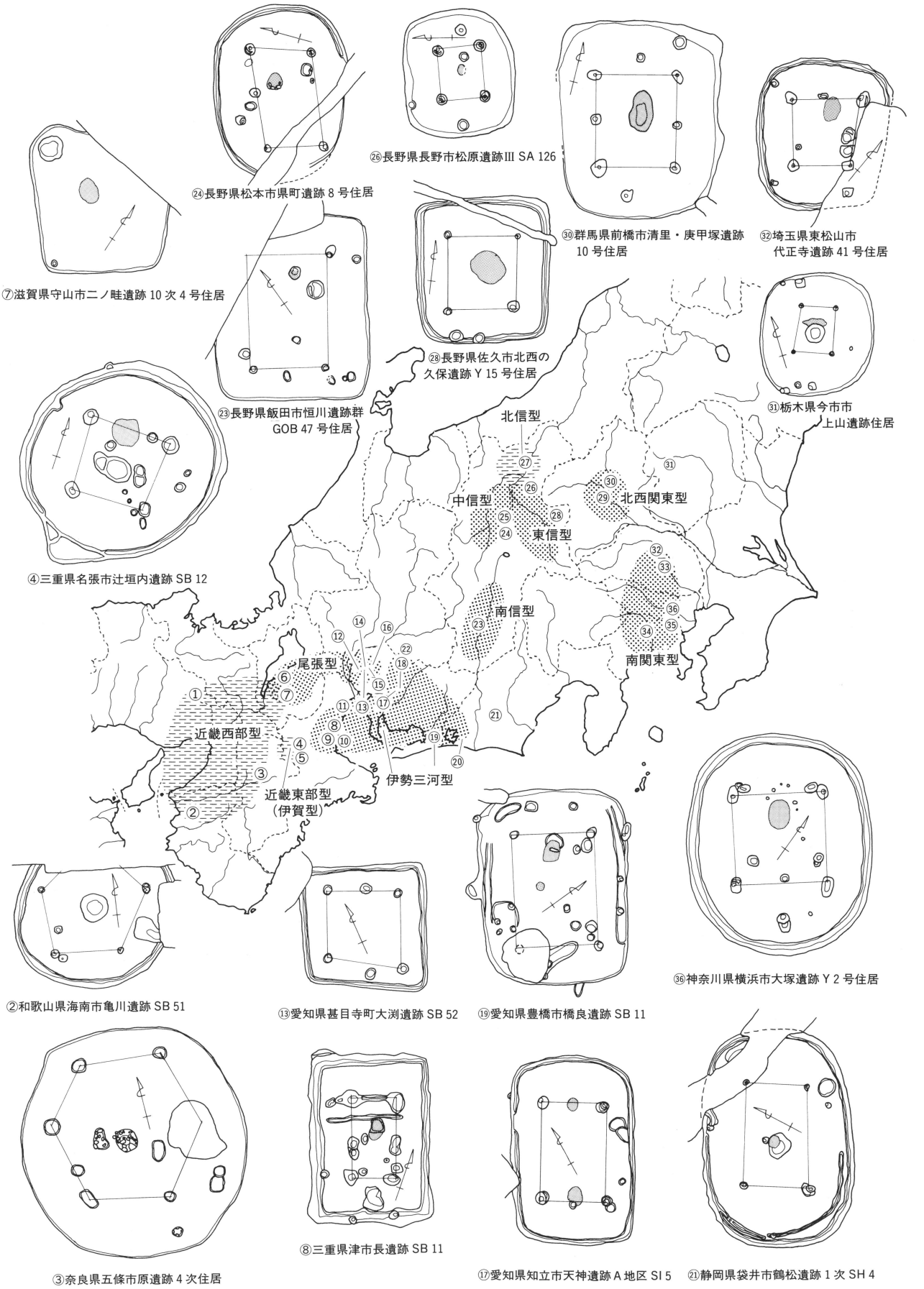
Ａタイプ

弥生時代中期後葉の関東以西では、九州、中国・四国・近畿西部・北陸、中部・関東の大きく３つの地域性がある。それぞれ長方形型・２本配置・地床炉、円形型・４本・多角形配置・灰穴炉、長方（方）形型・４本配置（＋棟持配置）・地床炉と竪穴住居の平面形態、主柱穴配置、炉の形態において違いがあり、異なる住居建築と住まい方の伝統がある(15)。この地域性は弥生時代の中期を通じて形成され、ほぼ弥生時代終末まで存在する。これらの地域性はいわば竪穴住居の大様式にあたる。今回設定した住居型では近畿東部型（伊賀型）・近畿西部型・北信型とその他の住居型との分布の境界にあたる。

Ｂタイプ

もう１つのタイプは今回検討し、設定した竪穴住居の住居型の分布境界である。各住居型は地域の小型式で地域性を示すとともに時代性も表すものと考える。そのため各住居型はまさに弥生時代の始めから形成され、弥生時代中期後葉という一時期においてのみ表れる住居型がほとんどで、次の後期になると平面形態や炉の形態・位置などが大きく変化する。また長野県の遺跡や三重県の遺跡でみられるように同時期の竪穴住居で全く異なる炉の形態が混在する場合がある。平面形態においても最も四角いのは伊勢地域の竪穴住居で、東にいく程隅が円くなり、辺が膨らみをもち、神奈川県周辺の地域で最も円い竪穴住居になる。このように竪穴住居の各要素が、一つの遺跡の中でバラエティーに富むと同時に、地域的にも漸移的なバリエーションをもつものである。したがってＢタイプの住居型の分布境界は主に地理的なバリエーションを切りとったものといえる。

Ｂタイプの住居型の境界は、未だ十分に確認で



第 I 図　竪穴住居の地域型（竪穴住居プランは I ：200）

きていないが、各住居型は特徴のある地域の住居をもって設定してあり、大まかな傾向を見ることは可能であろう。

②伊勢湾沿岸地域に表れた２つの住居型

次に各住居型の分布境界がもつ意味を具体的に考えるために伊勢湾沿岸地域の伊勢三河型と尾張型の住居について検討する（第２図参照）。

以下両住居型を比較するが、確認しておきたいのは、両住居型とも東日本における竪穴住居の大様式の中にある２型式である点で、長方形平面と主柱穴の長方形配置、地床炉が主体という３点では基本的に同じ伝統の上に成立している。ここで比較するのはその中で表れた共通点と違いである。

共通点は炉の位置、平面形態にある。炉の位置は、尾張型・伊勢三河型・南信型・南関東型の住居が偏在型を主体にしており、他住居型の住居は中央型に主体がある。南関東型と炉の位置において共通するが、静岡県袋井市鶴松遺跡１次ＳＢ４（第１図参照）や同藤枝市内の遺跡において、中央型のものが認められるので、伊勢湾沿岸地域における独自の特徴と考えられる。平面形態では、三河地域でも東にいく程、東日本全体にある円形化の動きの中で胴張長方形型の住居が多くみられ、尾張地域においてもその影響があるように思われる。

反対に相違点は主柱穴配置と石置炉の有無にある。尾張型の竪穴住居に主柱穴がないわけではないが、尾張型住居では超特大の住居は別として、確認されているもので主柱穴の深さは10cm～20cmと浅く、定型的な配置がない(16)。伊勢三河型の住居と一見して区別できるものと思われる（第３図参照）。伊勢三河型の長方形配置は、西の伊勢地域において近畿東部型の方形配置からの影響も否定できないが(17)、小型住居から大型住居まで一貫して主柱穴が長方形に配置されるので、平面形態とあわせて東日本からの影響と考えておきたい。

また石置炉の存在は弥生時代中期中葉において阿弥陀寺遺跡ＳＢ19・ＳＢ54の他に伊勢湾西岸地域にはなく、中期前半の長野県の諏訪市荒神山遺跡７２号住居、下伊那郡喬木村阿島遺跡住居、神奈川県秦野市砂田台遺跡７６号住居など資料的には多くないが、東日本の地域に広く分布を確認できる(18)。したがって伊勢三河型住居の石置炉の存在もいつ伝播したかは不明だが、その系譜を長野県などの東日本の地域に求めておきたい。

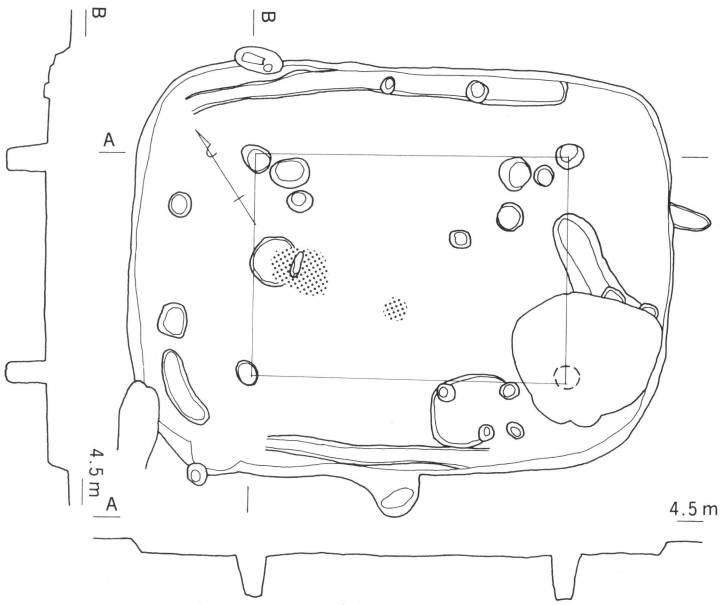
よって両住居型の共通点として考えた平面形態と炉の位置は東日本全体にある変化から比較的影響が弱く、伊勢湾沿岸地域の地域性が表れたもので、相違点として考えた主柱穴配置と石置炉の存在はより東の地域からの影響が強く表れたものといえる。次にこの影響の差が生まれる背景を考えたい。

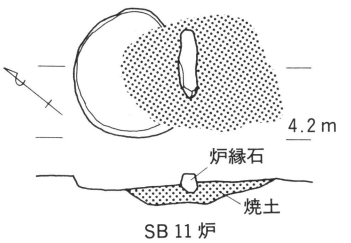
③住居型に表れた違いの背景

前節で指摘した影響の差が生まれる背景として考えられるのは、人の交流関係と竪穴住居という構造からの要因があると思われる。

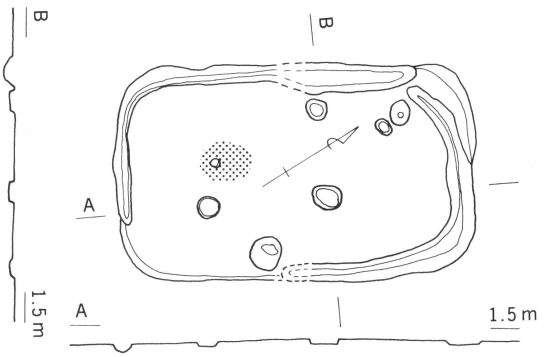
まず人の交流関係についてであるが、地理的な影響によって人の交流関係の違いがあることは確かと思われる。しかしこれまでの土器からの研究では、弥生時代中期後葉の搬入土器のあり方から、三河地域と伊勢地域でのあり方が三河地域と尾張地域のあり方より高いとはいえない(19)。凹線紋系土器群の伝播に伴う技術の移動についても、伊勢地域と三河地域との関係が特に強く表れているわけではなく、台付甕の分布の点からいえば、伊勢北部の地域は別として、伊勢地域の中南部ではほとんど確認されていない(20)。つまり人の移動に伴う交流関係の頻度や質の違いと関係しないと思われる。

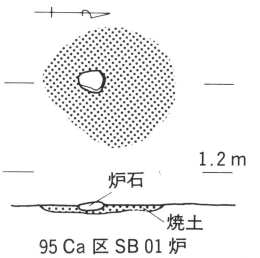
また胴張りをもつ平面形態が尾張地域でも少なからず認められている点（第２図３）(21)や平面形態の変化が地理的なバリエーションをもつこと、



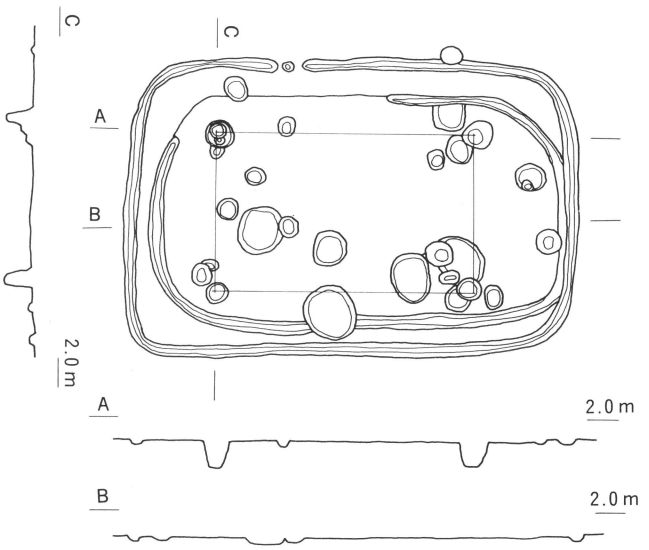


1．伊勢三河型住居（愛知県豊橋市橋良遺跡 SB 11）



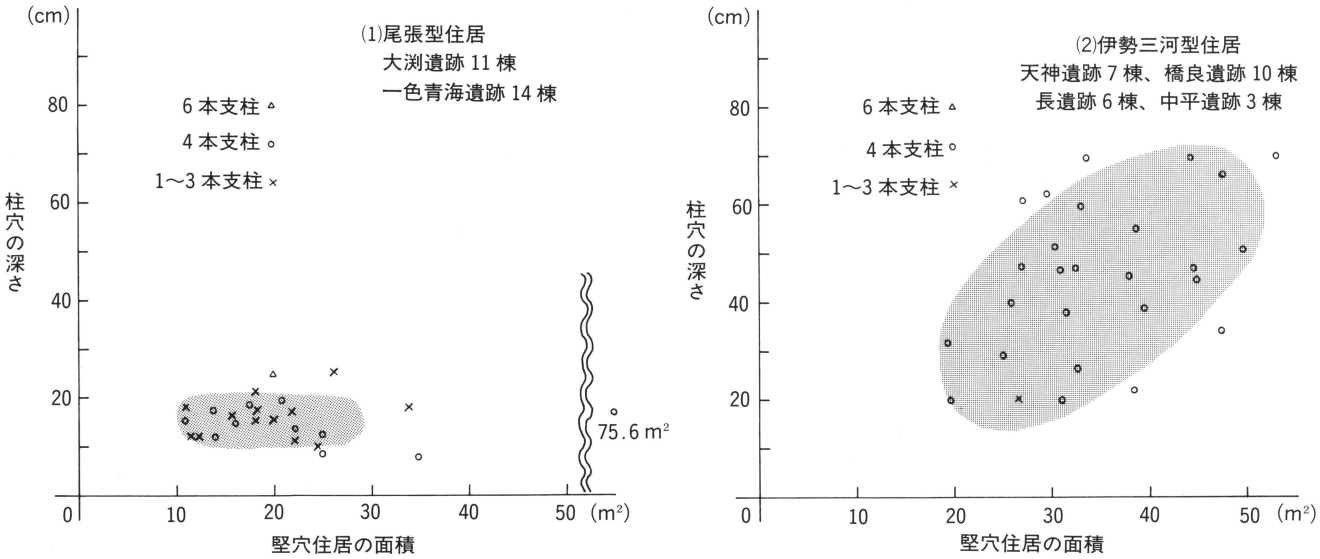


2．尾張型住居（愛知県稲沢市一色青海遺跡 95 Ca 区 SB 01）



3．伊勢三河型住居（愛知県清洲町朝日遺跡 62 A 区 SB 01 a・b）

第 2 図　伊勢三河型住居と尾張型住居
（竪穴住居プラン・断面は 1：00、炉は 1：40）



第 3 図　尾張型と伊勢三河型の床面積と主柱穴の深さ（床面からの平均値）

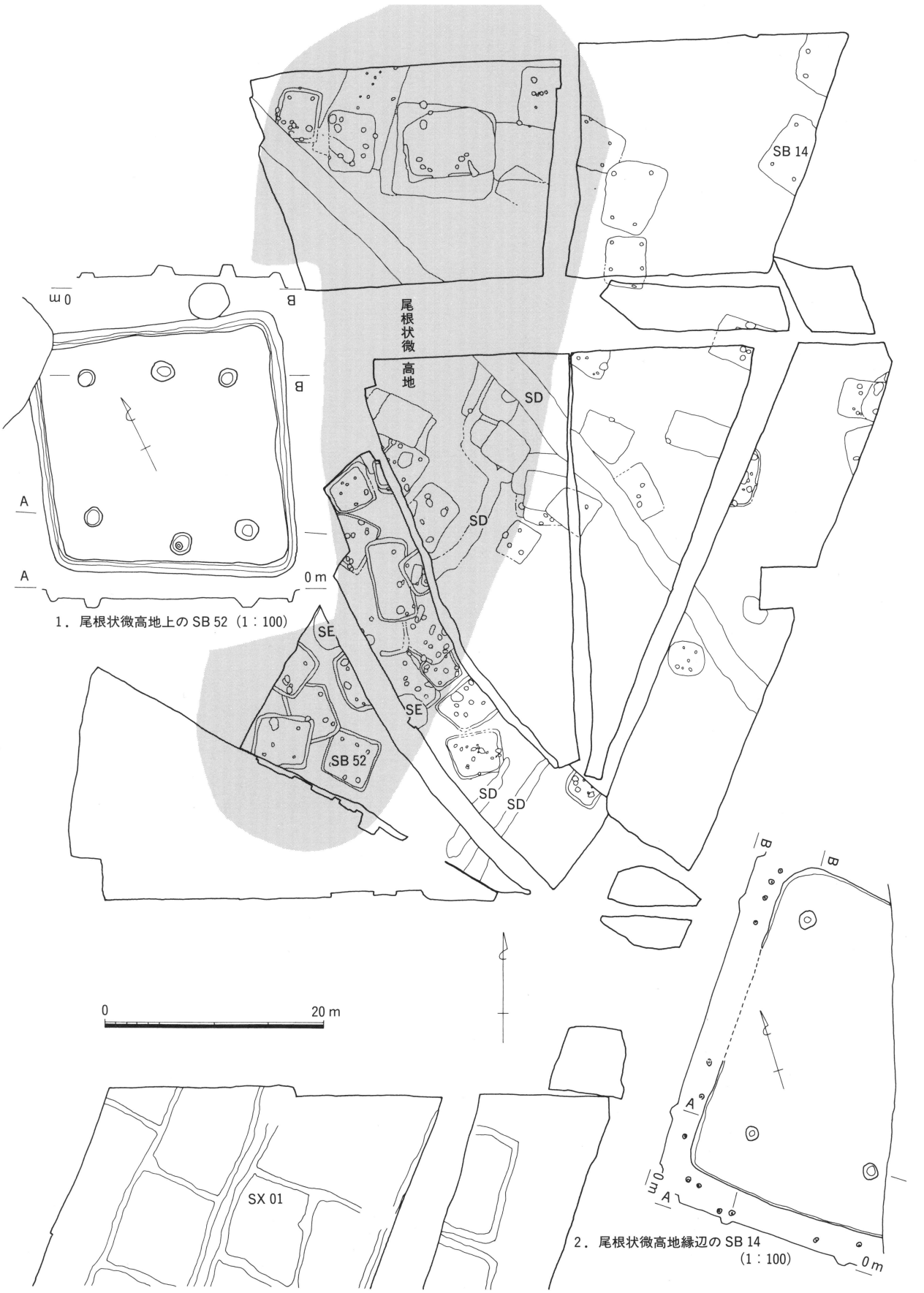
炉の位置については共通性をもつことを指摘した。よって人の移動から表れる交流関係の頻度は住居形態においても表れているものと思われる。伊勢地域で全く胴張りのある平面形態がない点は、交流関係の頻度が尾張地域より低い要素と思われる。

すると住居という構造との関係についてが問題になる。2つの住居型に表れた相違点は、先述した主柱穴配置と石置炉の存在についてである。尾張型住居の主柱穴配置において無主柱が多い点、主柱穴配置が安定していない点、柱穴が浅い点がある。

また炉の形態で地床炉が2つの住居型で主体であることは変わらないが、厳密にいくと三河地域の地床炉は5cm〜10cm前後に浅く掘りくぼめた面を火床とするものが多く、伊勢地域の長遺跡、山籠遺跡でも少なからず認められる。尾張型住居の炉の検出率は伊勢三河型住居に比べて低く、火床も掘りくぼめられたものは希である。これは遺跡の基盤が砂地であるから焼けにくいというだけではなく、同じ地床炉でも炉の構造（火床面の高さ）に違いがあるように思われる。つまり床面に砂、あるいは灰を数cm以上置いた上を火床としている可能性が高いのではないかと思われる。特に尾張型住居だけではないが、これは床面が焼けず、炭層が床にこべり付くように遺存する例がある点からも想定できる。

ではこの2つの違いは何によるのであろうか。尾張型住居の多く見つかっている遺跡は濃尾平野の沖積微高地にある。また尾張地域の経済・文化的中心は、朝日遺跡に代表される環濠集落にあり、また沖積地にある。この2つの点から比較的地下水位の高い環境下での竪穴住居では、柱の根腐りを防ぐためや炉の火床を床下からの湿気から防ごうとした結果とも考えられる(23)。このことは同じ沖積地の遺跡である大渕遺跡や阿弥陀寺遺跡でも床面のレベルに関係なく、尾根状微高地の上に占地する住居で柱穴が認められ、その縁辺部では住居の数も少なく柱穴もあまり見つかっていない(第4図参照)。

逆に現在典型的な伊勢三河型住居の多く見つかっている長遺跡や天神遺跡・荒新切遺跡などは洪積台地上の比較的高燥な環境下にある。また長遺跡は三重県の津市周辺の拠点的な集落と考えられる(24)。



第 4 図　竪穴住居の占地と形態（愛知県甚目寺町大渕遺跡下面）

以上のことから尾張型住居と伊勢三河型住居の形態の違いは、遺跡立地の違い、しかも地域の拠点集落である遺跡の立地分布の差が表れた結果と考えたい(25)。したがって同様な炉の形態をもつ三河地域と伊勢地域において石置炉が受容され易かったものと考えておきたい。

住居型の変化する背景

さて最後に住居形態が変化する背景について考えたい。住居形態の変化は基本的に地域から地域への伝播によって変化するものと思われるが、その伝播には土器などのモノとは別に、より深い人の交流なくしてはありえないものと思われる。

今回検討した弥生時代中期後葉の伊勢湾沿岸地域では、地域の中心となる遺跡の立地環境から、住居形態の伝播に際して保守性の表れた尾張地域とより受容に寛容であった伊勢・三河地域において２つの住居形態の地域性が生まれたものと考えた。この場合は住居型分布境界のＢタイプにあたるが、その変化には人の交流・移動（移住）があり、住居型の各要素の地理的なバリエーションの存在から基本的には隣接する地域間の交流が主に反映された可能性が高い。

今後はＡタイプの住居型の分布境界の変化や他のＢタイプの分布境界の変化についても考える価値はあるように思える。他の地域においても尾張地域と同様な場合が存在するのかという点も興味深いものである。また今回は触れなかったが、弥生時代中期後葉に出現する壁際の土壙についてや、異なる住居型の住居が同じ遺跡で存在する場合などについても考えていきたい。

謝辞

本稿は平成３年１月に三重大学人文学部に提出した卒業論文と平成４年３月に大阪大学文学部に提出した研究成果の一部をもとに再考したものである。これまで暖かい御指導をいただいた八賀晋先生、都出比呂志先生、福永伸哉先生に感謝したい。また本稿をなすにあたって、三重県埋蔵文化財センター・長野市埋蔵文化財センター・奈良県立橿原考古学研究所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・市立五條文化博物館・四日市市教育委員会の方々、直井雅尚氏、石黒立人氏には資料収集の際、大変お世話になった。記して感謝の意としたい。

［註］

(1) 和島誠一・田中義昭「住居と集落」
『日本の考古学』Ⅲ弥生時代、河出書房、1966

(2) 石野博信「古代日本の住居」
『日本原始・古代住居の研究』第１章、
吉川弘文館、1985

(3) 橋本正「竪穴住居の分類と系譜」
『考古学研究』23－３、1976

(4) 宮本長二朗「住居」
『日本考古学』４集落と祭祠、岩波書店、1986
同　「住生活」『日本考古学を学ぶ』(2)［新版］原始・古代の生産と生活、有斐閣、1979
同「竪穴住居」『弥生文化の研究』７弥生集落、雄山閣、1987

(5) 都出比呂志「竪穴住居の平面形態」
『日本農耕社会の成立課程』第２章、
岩波書店、1986

(6) 高木実・吉田淳・宮本哲朗・楠正勝
「北陸の弥生・古墳時代の竪穴住居址－弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址を中心として－」
『北陸の考古学』、1983

(7) 神村透「弥生時代の住居と集落」
『長野県史』全１巻(4)長野県史刊行会、1988
同「長野県の弥生時代住居址にみる地域性と時代性」
『長野県考古学会誌』50号、長野県考古学会、1986
宮沢恒之「弥生住居址の分析」『信濃』25－12、1973
他に長野県考古学会編『中部高地における弥生集落の現状』長野県考古学会30周年記念大会資料集、1992において中部関東地域の資料が集成され、分析が行われている。

(8) 竹沢謙「栃木県における弥生時代の住居跡について」『栃木県史研究』19、1980
笹森紀巳子「久ヶ原式の住居と集落」
『古代探叢』Ⅱ、早稲田大学出版部、1985
佐藤明人「住居構造について」
『新保遺跡』Ⅱ、弥生・古墳時代集落編、

群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1988

(9) 第７回東海埋蔵文化財研究会編
『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題－土器・墓・ムラにみる画期と地域間交流－』、1990
山内伸浩「総括」『根本遺跡』
岐阜県多治見市教育委員会、1991
飯塚博和「住居址について」
『浜北市芝本遺跡遺跡Ｂ地点』
静岡県浜北市教育委員会、1985
松井一明「まとめ」『大門遺跡－袋井市大門遺跡第４次発掘調査報告書－』
静岡県袋井市教育委員会、1988

(10) 宮本長二朗「九州地方の弥生時代住居」
『王子遺跡』、鹿児島県教育委員会、1985
石川悦雄「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第５号、1991

(11) 石野博信「西日本・弥生中期の二つの住居型」『論集日本原史』、吉川弘文館、1985
同　「縄文から弥生へ」『日本の古代』４、中央公論社、1986
中間研志「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」
『東アジアの考古と歴史』中、
岡崎敬先生退官記念論文集、同朋社、1987

(12) 石野博信「弥生・古墳時代住居の屋内区分施設」『日本原始・古代住居の研究』、吉川弘文館、1990
宮本長二朗「ベット状遺構と屋内施設」
『季刊考古学』第32号、雄山閣、1990

(13) 比田井克仁「住居形態の変遷とその画期－弥生～古墳時代の南関東」、
滝口宏編『古代探叢』Ⅲ、早稲田大学出版部、1991
井上尚明「関東における後期弥生集落の一様相」
『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1983
林幸彦・花岡弘「弥生時代の炉－千曲川流域を中心として－」『信濃』35－４、1983

(14) 本論で各遺跡の参考、引用した文献は以下の通りである。

奈カリ与遺跡
井守徳男・佐藤良二・西尾知恵子
「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」
『兵庫県文化財調査報告書第16冊』
兵庫県教育委員会、1983

亀川遺跡
植田法彦・前田敬彦「亀川遺跡Ⅴ」
海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会、1985

原遺跡
坂　靖「原遺跡」五條市教育委員会、1992

辻垣内遺跡
中村信裕「辻垣内遺跡Ｅ地区」
『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財報告書』
三重県教育委員会、1983

下川原遺跡
門田了三「下川原遺跡」名張市遺跡調査会、1986

服部遺跡
大橋信弥・山崎秀二「服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ－滋賀県守山市服部町所在－」〈本文編〉滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、1986

二ノ畦遺跡・（横枕遺跡）
山崎秀二・伴野幸一「二ノ畦遺跡発掘調査報告書」
守山市教育委員会・守山市埋蔵文化財センター、1988
山崎秀二・伴野幸一「二ノ畦・横枕遺跡発掘調査報告書、益須寺遺跡発掘調査報告書」
守山市教育委員会・守山市埋蔵文化財センター、1990

長遺跡
萱室康光他「長遺跡発掘調査報告」
『津市埋蔵文化財調査報告17』津市教育委員会、1989

山籠遺跡
浅生悦生・増田安生「山籠遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1990

納所遺跡
伊藤久嗣・吉水康夫「納所遺跡－遺構と遺物－」
三重県教育委員会、1980

上野遺跡
春日井恒・花井千幸「上野遺跡」
『四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅵ』
四日市市遺跡調査会、1991
春日井恒「上野遺跡２」
『四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅸ』
四日市市遺跡調査会、1992

一色青海遺跡
石黒立人・服部俊之・宮腰健司他「跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡・船橋宮裏遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第51集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1994
前田雅彦・池本正明「一色青海遺跡」
『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報平成５年度』

㈶愛知県埋蔵文化財センター、1994
財団法人愛知県埋蔵文化財センター
「一色青海遺跡現地説明会資料」1995

大渕遺跡

宮腰健司・石黒立人・池本正明他「大渕遺跡」
『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集』
財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1991

阿弥陀寺遺跡

石黒立人他「阿弥陀寺遺跡」
財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1990

朝日遺跡

加藤安信・伊藤稔他「朝日遺跡」Ⅰ本文編・Ⅲ遺構図版編、
愛知県教育委員会、1982
石黒立人・宮腰健司他「朝日遺跡Ⅰ」遺構編、
財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1991

高蔵遺跡

㈶荒木集成館編『沢上二丁目501発掘調査報告書』
川島商事株式会社、1989

根本遺跡

山内伸浩・田口昭二「根本遺跡」
岐阜県多治見市教育委員会、1991

天神遺跡・荒新切遺跡

岡本茂史他『知立市西中遺跡群発掘調査報告書』天神遺跡
［A・B］、知立市教育委員会、1986
岡本茂史他『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
天神遺跡［B］・中長遺跡、知立市教育委員会、1987
岡本茂史他『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
知立市教育委員会、1988

橋良遺跡

小林久彦・水野季彦「橋良遺跡」
『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集』
豊橋市教育委員会、1994

中平遺跡

鈴木一守・鈴木敏則「西鴨江中平遺跡」
浜松市教育委員会、1982

鶴松遺跡

袋井市教育委員会「鶴松遺跡Ⅱ」1987
袋井市教育委員会「鶴松遺跡Ⅲ」1983

恒川遺跡群

小林正春他「恒川遺跡群」遺構編・遺物編、
飯田市教育委員会、1986

県町遺跡

直井雅尚他「松本市県町遺跡」（本文編・図版編）長野県松
本県ヶ丘高等学校・松本市教育委員会、1990

宮渕本村遺跡

神澤昌二朗・竹原学・関沢聡他「松本市宮渕本村遺跡」（遺
構編）松本市教育委員会、1986
直井雅尚・三村竜一他「松本市宮渕本村遺跡Ⅱ」（遺構編）
松本市教育委員会、1987

松原遺跡

飯島哲也・寺島孝典他「松原遺跡」『長野市の埋蔵文化財第
40集』長野市教育委員会、1991
矢口忠良他「松原遺跡Ⅱ」『長野市の埋蔵文化財第51集』
長野市教育委員会、1993
飯島哲也・寺島孝典他「松原遺跡Ⅲ」
『長野市の埋蔵文化財第58集』長野市教育委員会、1993

中俣遺跡

千野浩他「中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡」
『長野市の埋蔵文化財第41集』長野市教育委員会、1991

北西の久保遺跡

林幸彦「北西の久保」佐久市教育委員会、1984
小山岳夫編「北西の久保－南部台地上の調査－」
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター、1987

清里・庚申塚遺跡

相京建史他「清里・庚申塚遺跡」
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1981

新保遺跡

佐藤明人・石塚久則・平野進一他「新保遺跡Ⅱ」弥生・古
墳時代集落編、群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文
化財調査事業団、1988

上山遺跡

竹沢謙・塙静夫他「上山遺跡」
『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第13集』、
栃木県教育委員会・日本道路公団東京支社、1974

代正寺遺跡

鈴木孝之・石塚和則「代正寺・大西」（第１分冊）
『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集』、
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1991

附島遺跡

加藤恭朗・柳楽理・福本晴夫「附島遺跡－附島遺跡発掘調
査報告書Ⅰ－」埼玉県坂戸市教育委員会、1985
加藤恭朗他「附島遺跡－附島遺跡発掘調査報告書Ⅲ－」
埼玉県坂戸市教育委員会、1988

砂田台遺跡

穴戸信悟・谷口肇・豊田秀治他「砂田台遺跡Ⅱ」
『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20』
神奈川県立埋蔵文化財センター、1991

折本西原遺跡

石井寛・倉沢和子他「折本西原遺跡」
横浜市埋蔵文化財調査委員会、1980

大塚遺跡

武井則道編「大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅰ　遺構編－」横浜市埋蔵文化財センター、1991

⑮ 註(5)と同じ。都出が指摘した二本主柱構造、求心構造、対称構造にほぼあたるものを考えている。

⑯ 愛知県清洲町朝日遺跡の竪穴住居について、Ⅳ期以降４本で柱穴が確認しやすくなると指摘されている（朝日遺跡1991報告第７章Ｐ156～157)。

⑰ 三重県四日市市上野遺跡では、ほぼ半数の住居で隅丸方形平面・方形主柱穴配置で、続く弥生時代後期の住居型が存在する。

⑱ 資料的に多くはないが弥生時代中期前半の例として諏訪市荒神山遺跡72号住居、下伊那郡喬木村阿島遺跡住居の炉では、住居内で偏在した位置に設けられている（註(7)神村1988など)。

⑲ 近畿地方から伊勢湾地方への土器の搬出例はないとされている（伊藤淳史「弥生時代における地方間交流－伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動－」『史林』第77巻第４号、史学研究会、1994、Ｐ61など)。

⑳ 石黒立人「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書'86」『東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会、1986
台付甕の成立と脚台の高脚化なども伊勢北部地域から尾張の地域で達成されたとされている。
深澤芳樹「尾張における凹線紋出現の経緯－朝日遺跡出土土器の検討から－」
『朝日遺跡Ⅴ』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1994
壺・甕の調整方法では、尾張地域と三河地域の類縁性が伺われるが、高杯の調整方法では、伊勢地域と三河地域の類縁性がある。

㉑ 第２図３の愛知県朝日遺跡の竪穴住居では、胴張長方形型の住居と隅丸長方形型のものが重複して見つかっている。主柱穴配置は長方形配置で柱穴は深さ34cm～44cmあり、炉は確認されていないが伊勢三河型住居の特徴を持つものである。

㉒ 愛知県大渕遺跡では52棟の竪穴住居が見つかっているが、炉は検出されていない。反対に三重県の長遺跡・山籠遺跡・北野遺跡、愛知県天神遺跡・荒新切遺跡・橋良遺跡では50％以上の住居で地床炉などが確認されている。

㉓ 近畿西部型などの住居にある灰穴炉も基本的には深く穴を掘って、床下からの毛管現象を断ち切るための工夫とも考えられる。
また尾張地域の炉の形態が火床を高くする方向性を持っていたとすると、尾張地域において台付甕が生まれてきた要因の一つと考えることも不可能ではない。

㉔ 三重県埋蔵文化財センター
「長遺跡～弥生時代中期（2000年前）の大集落～」
『中勢道路調査ニュースNo.24』1995
平成６年度の津市教育委員会の調査と併せて200棟以上の竪穴住居が見つかっている。
遺跡の見学に際して、三重県埋蔵文化財センター池端清行氏、米山浩之氏に案内していただいた。記して感謝の意としたい。

㉕ 遺跡の立地・占地により竪穴住居の形態が変化することが兵庫県奈カリ与遺跡などで指摘されている。
合田茂伸「平地の住居と斜面の住居－弥生時代における竪穴式住居の地形立地と形態－」『播磨考古学論叢』1990